『筑波日本語研究』 第十五号 筑波大学 人文社会科学研究科 日本語学研究室 2010

受動文の「～ている」形について

楊　卓郎

キーワード：自他両用動詞、「～ている」形、過程性、結果性

要　旨

本稿では、自他両用の漢語動詞を対象とし、受動文の「～ている」形が表すアスペクト的意味について考察する。自他両用動詞の受動文の「～ている」形は、「進行」と「結果」を両方とも表す動詞と、「結果」だけを表す動詞がある。同じ主体動作・客体変化動詞であるにも関わらず、受動文のアスペクト的意味に違いが現れる理由として、それらの動詞が持つ「過程性」と「結果性」の違いに原因があることを指摘する。「停止する」「実現する」のような動詞は「－過程性」「＋結果性」の性質を持ち、「分解する」「解決する」のような動詞は「＋過程性」「＋結果性」の性質を持つことを論じる。

1. はじめに

従来の先行研究では、変化動詞の「～ている」形の意味について、能動文では「進行」解釈を表し、受動文では「結果」解釈を表わすと指摘されている[1]。

(1) a.　太郎が塀を壊している。＜進行相＞
　　b.　塀が壊されている。　　＜結果相＞

[杉本 (2007)、p.148]

1　「～ている」形の意味について、工藤 (1995) では「動作継続」と「結果継続」、金水 (2000) では「進行」と「結果」、杉本 (2002) (2007) では「進行相」と「結果相」という用語で説明している。本稿では、論の便宜上、「進行」と「結果」に統一することにする。

しかし、自他両用の漢語動詞の中には、(2b) のように、受動文の「～ている」形が「結果」と「進行」を両方とも表わす動詞が存在する。

(2) a.　政府が不良債権問題を解決している。　　＜進行＞
　　b.　不良債権問題が解決されている。　　＜結果＞＜進行＞

本稿では、先行研究を概観した上で、自他両用動詞における受動文の「～ている」形のアスペクト性について、他動詞文の「～ている」形と比較しながら考察を行う。

2. 先行研究

2. 1. 工藤 (1982) (1995)

工藤 (1995) では、現代日本語の動詞をアスペクト対立の有無の観点から「外的運動動詞」「内的状態動詞」「静態動詞」に 3 分類している。また、「外的運動動詞」は、＜動作＞か＜変化＞かという観点と、＜主体＞か＜客体＞かという観点から、次のように 3 分類できるとしている。

(3) (A・1) 主体動作・客体変化動詞―開ける、折る、消す、倒す、曲げる、入れる、並べる、抜く、出す、運ぶ、作る
　(A・2) 主体変化動詞―行く、来る、帰る、立つ、並ぶ、開く、折れる、消える、曲がる、入る、出る、太る、就職する
　(A・3) 主体動作動詞―動かす、回す、打つ、蹴る、押す、食べる、見る、言う、歩く、泳ぐ、走る、泣く、飛ぶ、揺れる
[工藤 (1995)、pp.71-72]

(4) ・主体動作・客体変化動詞　　動作継続　(能動)　/　結果継続　(受動)
　・主体変化動詞　　結果継続
　・主体動作動詞　　動作継続　(能動・受動)
[工藤 (1995)、p.72]

工藤 (1995) では、主体動作・客体変化動詞は主体の観点からは動作を、客体の観点からは変化をとらえていて、すべて他動詞であるとしている。また、この動詞グループの特徴について、他動詞であるがゆえに、能動と受動の対立があって、能動

では「進行」を表すが、受動では「結果」を表すと述べている。

(5) ＜動作継続＞

・隣の人が、コスモスを植えていた。／花子さんが、窓を開けている。

＜結果継続＞

・コスモスが植えられている。／窓が開けられている。

[工藤 (1995)、p.83]

工藤 (1982) では、「進行」を表す主体動作・客体変化動詞であっても「客体の変化の結果の継続」を表すようになる場合があるとし、その構文的条件について (6) のように指摘している。

(6) (ｉ) 意志的動作主体を表す主語が欠如している場合。

・去年の夏、ひまわりの咲いていたうち、今年は何という花か、西洋菊のような花を植えているね。(山の音)

・往来に近い鮎沢の家では、注意深くガンドウのような深い遮光笠を茶の間の電燈につけていた。(播州平野)

・昨日、行ったけれど雨戸を閉めていましたよ。(海と毒薬)

・よごれた窓から雨に濡れた街が見える。(中略) うすぎたない電信柱に紀文のおでんだのサンヨーテレビだのという広告をうちつけている。(札の辻)

・「この軸いつ見ても好きですわ。」「ぼくも気に入っている。(中略) 旅館の方で値打を知って出しているのか、知らないで出しているのかね。」(運河)

(ii) 主語が意志的動作主体を表わしていない場合。

・一なんだかガスが臭うような気がして、徹さんがストープひっくり返してるんじゃないかと心配で、見にいっていたんですよ。(亜紀子)

・節子は糸屑を落としてなくしていた。さがす気力はなかった。(帰郷)

(iii) ii と同様、主語が意志的動作主体を表わしていず、基本的に無生 (inanimate) であって、原因、手段、材料を表わしている場合。

＜原因＞

・消防車が出かける頃には、沼津は町中飛火で、火焔が空を染めていた。(人間の運命)

・田中は椅子に腰かけかじかんだ手足を暖めたが、日本を出発する前に買った靴も巴里に来てから手入れをしないため、溶けた雪が染みこんで、靴下を気味悪く濡らしていた。（留学）

＜手段＞

・宮本さんの蔵書の一部も教員室の中を飾っていた。（桜の実の熟するとき）

・そしたら、ぐいと手応えがあった。庖丁が左の人差指と中指の第二関節の皮膚を削っていた。（流れる）

・二本のロープと二本のワイヤァはこの杭と浮標を結びつけていたのである。（潮騒）

＜材料＞

・そこには乗客が列をつくっていた。（僕たちの失敗）

・その側には、この町なかなのに、雑草が大きく繁った藪を作っている。（帰郷）

［工藤（1982）、pp.59-60］

また、工藤（1982）は（7）のように、変化する客体が主語で示される主体の部分である場合、または客体を主体にとりつけたり、取り外したりする場合には、「主体の変化の結果の継続」を表すようになると述べている。

（7）・信子と乙枝の二人は体をぴったりと寄添うように立って、こちらに向かって手を挙げていた。（夏愁平野）

・被害者が前歯を全部折っていたからである。（あすなろ物語）

・その娘だった。（中略）顔を醜い程に真白く塗っていた。（明暗）

・眼鏡を外しているんで、眼が見えないんだよ。（夏草冬濤）

・三四郎は懐に三十円入れている。（三四郎）

・彼はジャンパーを着て、首まきまで巻いていた。（自分の穴の中で）

［工藤（1982）、p.61］

2.2. 金水（2000）

金水（2000）では、「シテイルの継続相が「進行（progressive）」を表すか、「結果（resultative）」を表すかを決定するためには、（8）のような要因が絡むとされている」と述べている。

(8) a. 動詞固有の意味のアスペクト的な性質
b. 受身、使役、あるいは主語・目的語などの項の性質、連用修飾語などの形態的・構文的条件
c. 発話状況やテキストなど、文脈的な条件

[金水 (2000)、p.16]

金水 (2000) は、過程とは、運動の主体の活動 (意志的なものが典型であるが、無意志的なものもある) を指し示すとし、このような過程を持つ動作動詞はシテイルで「進行」を表すとしている。また、結果状態とは、動詞が表す出来事が達成されたときに必然的にもたらされる状態のことであり、主体に変化の結果が現れる変化動詞はシテイルが「結果」の意味になると述べている [2]。また、主体が客体に働きかけた結果、客体が変化する主体動作・客体変化動詞は、シテイルの意味としては「進行」になり、動作動詞と認定されると述べている。

(9) a. 今、田中さんは窓を開けている (最中だ)。 <進行>
b. 今、田中さんは熊を殺している (最中だ)。 <進行>
c. 今、田中さんは家を建てている (最中だ)。 <進行>
d. 今、田中さんは夕食を作っている (最中だ)。 <進行>

[金水 (2000)、p.28]

金水 (2000) は、(9) のような動詞のシテイル形が「進行」になる理由については、主体の運動としてはあくまで過程があるだけで、なんら結果状態を伴わないからであると説明している。また、継続相のシテイルで「進行」しか出ないのは、主体動作の部分がシテイルの意味として生き、客体変化の部分は抑圧され、表面には出てこないためであると述べている。なお、日本語の典型的な主体動作・客体変化動詞は、(10) のように、形態的に対応する自動詞をペアとして持つものが多く、他動詞は主体動作・客体変化動詞であり、自動詞は主体変化動詞であるとしている。また、(10) の対において、(11) のように、他動詞のシテイルは基本的に「進行」を、自動詞のシテイルは「結果」を表すと述べている。

2 金水 (2000)、pp.17-18。

(10) ［切る|切れる］、［倒す|倒れる］、［付ける|付く］、［壊す|壊れる］、
［建てる|建つ］、［破る|破れる］、［焼く|焼ける］、‥‥

［金水 (2000)、p.29］

(11) a. 今、木こりが木を倒している。　＜進行＞
b. 今、(目の前に) 木が倒れている。＜結果＞

［金水 (2000)、p.29］

また、金水 (2000) は、主体動作・客体変化動詞を受身文にすると、受身文という統語操作によって、客体が新たな主体となり、抑圧されていた結果状態が前景化され、シテイルが「結果」の意味を表わすようになると説明している[3]。

(12) a. 今、木こりが木を倒している。　＜進行＞
b. 今、木が倒されている。　＜結果＞
(13) a. 今、猟師が熊を殺している。　＜進行＞
b. 今、熊が殺されている。　＜結果＞

［金水 (2000)、p.29］

ただし、金水 (2000) は、主体動作・客体変化動詞の受身文のシテイルは「結果」だけではなく、「進行」を表わせると指摘し、次のような例を挙げている。

(14)　今、木こりによって木が倒されている最中だ。
(15)　今、猟師によって熊が殺されている最中だ。

［金水 (2000)、p.31］

3　(12b) (13b) の用例の判定に関しては、個人的に不自然さを覚える。「木が倒されている」「熊が殺されている」のような受け身文の「～ている」形が「結果」を表わすということに反論を出すつもりはない。ただし、(12b) (13b) の場合、「今」が含まれることによって、逆に「結果」の意味として解釈しにくくなるのではないかと思われる。つまり、目の前に「倒れた木がある」「死んだ熊がある」のような結果を述べるというよりも、「木が倒れつつある」「熊が (殴り) 殺されつつある」のような「進行」の解釈が強くなるのではないかと思われる。

金水 (2000) では、(14) (15) の「～ている」形が「進行」を表わす理由について、別途の説明を付してはいないが、次の 2.3 節で述べるように、動作主が文中に表れることが「進行」の解釈を導くということであると思われる。

2.3. 杉本 (2002)

杉本 (2002) は、「～ている」形の「結果」解釈について動作主の不在が関係しているとし、次のような仮説を立てている。

(16) 「動作主不在仮説」
　変化動詞文において動作主が存在しない場合、結果相解釈が許される。
[杉本 (2002)、p.43]

杉本 (2002) は、(17) ～ (19) のような例をあげ、(b) では「結果」解釈が許されるが、(a) では動作主が存在するため、「結果」解釈が許されないと述べている。

(17) a.　外堀が徳川軍に埋められている。
　　b.　外堀が埋められている。
(18) a.　人質が強盗に縛られている。
　　b.　人質が縛られている。
(19) a.　生徒が先生によって校庭に集められている。
　　b.　生徒が校庭に集められている。　[杉本 (2002)、p.42]

以上のように、先行研究において「～ている」形が「結果」を表わすとされているのは、(20) のような場合である。

(20) a. 主体変化動詞文の場合：工藤 (1982) (1995)、金水 (2000)
　　b. 主語が非動作主である客体変化動詞文の場合：工藤 (1982) (1995)
　　c. 主体動作・客体変化動詞の受動文の場合：工藤 (1982) (1995)、金水 (2000)
　　d. 動作主が存在しない受動文の場合：杉本 (2002)

以下では、自他両用動詞の「～ている」形を (20) の結果と比較しながら分析を行う。

3. 自他両用動詞の「～ている」形

本稿の研究対象である自他両用の漢語動詞は、(21)～(23)でみられるように、他動詞文の目的語が自動詞文の主語として表わされる、自他交替する動詞である。

(21) a. 日本政府が不良債権問題を解決した。
　　 b. 不良債権問題が解決した。

(22) a. 太郎が車のエンジンを停止した。
　　 b. 車のエンジンが停止した。

(23) a. 政府が税率の引き下げという国民の要求を実現した。
　　 b. 税率の引き下げという国民の要求が実現した。

「解決する」「停止する」「実現する」のような動詞が他動詞として使われる場合、主語の働きかけによって対象に変化が生じる、工藤(1995)でいう主体動作・客体変化動詞に属する。これらの動詞の「～ている」形の意味を、第2節で述べた先行研究の立場から考えると(24)のような結果が期待される。

(24) a. 他動詞文(主体動作・客体変化動詞)：「進行」
　　 b. 自動詞文(主体変化動詞)：「結果」
　　 c. 受動文：動作主が存在しない場合―「結果」
　　　　動作主が存在する場合―「進行」

以下では、自他両用動詞の「～ている」形の意味を他動詞文の場合と受動文の場合に分けて検討していく。

3.1. 他動詞文の場合

まずは、他動詞文の「～ている」形の意味について確認してみよう。(25)～(27)の文は、先行研究の説明から考えると、(24a)に示したように「進行」解釈を表わすことが期待される。しかし、(25)「解決する」と(26)「停止する」、(27)「実現する」は、「～ている」形において異なる解釈を表わしている。

(25)　日本政府が不良債権問題を解決している。　＜進行＞
(26)　太郎が車のエンジンを停止している。　＜結果＞
(27)　政府が税率の引き下げという国民の要求を実現している。　＜結果＞

(25) の文が「進行」の解釈を表わすのは、工藤 (1982) の言うように、主語が「動作主」であり、意図的な動作主体の働きかけによる客体の変化を表わすためであろう。では、(26) (27) は、なぜ「進行」ではなく、「結果」の解釈を表わすのであろうか。

杉本 (2002) は、(28) (29) の文が「結果」解釈を受けるのは、主語の「山田さん」が動作主ではなく、経験者であるため、「～ている」形が「結果」解釈を受けると述べている。

(28)　山田さんが足を痛めている。
(29)　山田さんが腕を折っている。

[杉本 (2002)、p.45]

(26)「停止する」と (27)「実現する」の場合、主語が動作主であるにも関わらず、「～ている」形が「結果」の解釈を表わしており、この場合、工藤 (1982) の説明と杉本 (2002) の動作主不在仮説では説明できないと思われる。というのは、工藤 (1982)、杉本 (2002) では、(26) (27) のような「～ている」形を、「結果」ではなく、「経験」として解釈しているからであると思われる。「経験」というのは、過去にある出来事が起こったことを示し、その経歴があるかどうかということを表わす。一方、「結果」というのは、過去に起こった変化の状態が現在も存在することである。森山 (1988) では、工藤 (1982) の「結果」を「維持」と「結果持続」に分けて説明している。「維持」とは、結果が主体の意志によって、保存・維持中という意味であり、つまり、動きの結果の保存が主体的に行われることを表す。(26) の場合、「車のエンジンの停止」は主語である「太郎」の意志によって主体的に行われることが可能であり、森山 (1988) でいう「維持」で説明できるのであろう。しかし、(27) の「国民の要求の実現」が、必ずしも動作主である「政府」の意志によって保存・維持されているとは言いにくいと思われる。

本稿で、(26) (27) を「結果」として解釈するのは、(30) (31) からも見られるように、「～ている」形が表わす状態が「主体」ではなく「客体」の現在の状態であると判断したからである。

(30)　太郎は昨日からこの車のエンジンを停止しています。だから、動くことはありません。

(31)　政府は税率の引き下げという国民の要求を満たす政策を出しました。現在、国民の要求を十分、実現しています。

3. 2. 受動文の場合

次は、受動文においての「～ている」形の意味について検討する。主体動作・客体変化動詞の受動文の「～ている」形は、先行研究の説明から考えると、動作主が存在しない場合は「結果」解釈を、動作主が存在する場合は「進行」解釈を表わすことが期待される。

では、次の例を見られたい。

(32) a.　不良債権問題が解決されている。　＜結果＞＜進行＞
　　b.　不良債権問題が政府によって解決されている。　＜結果＞＜進行＞

(33) a.　車のエンジンが停止されている。　＜結果＞
　　b.　車のエンジンが太郎によって停止されている。　＜結果＞

(34) a.　税率の引き下げという国民の要求が実現されている。　＜結果＞
　　b.　税率の引き下げという国民の要求が政府によって実現されている。　＜結果＞

(32) ～ (34) の受動文は、(a) は動作主が存在しない例であり、(b) は動作主が存在する例である。まず、(32)「解決する」の例からみると、動作主の有無に関係なく、「～ている」形が「結果」と「進行」の両方の意味を表わしている。(32a) は動作主が存在しないため、「～ている」形が結果の意味を表わすことが期待されるが、「不良債権問題が解決されつつある」という「進行」の解釈も不可能ではない。

「停止する」と「実現する」の場合、(33a) (34a) が「結果」の解釈を表わすのは、杉本 (2002) の動作主不在仮説により説明できる。しかし、(33b) (34b) では、動作主が存在するにも関わらず、「進行」ではなく「結果」の意味を表わしている。

以上のように、受動文の「～ている」形の意味において、先行研究の指摘と自他両用動詞ではズレが生じる場合がある。先行研究とのズレを【表１】にまとめる。

【表１】受動文においての「～ている」形のアスペクト意味のズレ

動作主の有無	動作主不在仮説 (杉本(2002))	「解決する」	「停止する」「実現する」
動作主あり	進行	進行・結果	結果
動作主なし	結果	進行・結果	結果

4. 自他両用動詞と過程性

第 3 節では、「解決する」と「停止する」「中断する」の動詞が、「～ている」形において異なる意味を表わすことを確認した。これらの動詞は、同じ主体動作・客体変化動詞であるにも関わらず、なぜアスペクト性において異なった振る舞いを見せているのだろうか。その要因として、それぞれの動詞の持つ「過程性」と「結果性」において違いがあるのではないかと考えている。本節では、「解決する」と「停止する」「実現する」の動詞と同じ性質を持つと思われる動詞をいくつか取り上げて、「～ているが、まだ全部 (完全に) ～たわけではない」というテストを用いて、「過程」の局面が取り上げられるかどうかを調べることにする[4]。

まずは、「解決する」のような動詞の他動詞文と受動文から見ていく。

(35) a. 日本政府が不良債権問題を解決しているが、まだ全部 (完全に) 解決したわけではない。

b. 不良債権問題が解決されているが、まだ全部 (完全に) 解決されたわけではない。

4 森山 (1988) の「～しているが、全部 (あるいはそれに該当する量規定成分) ～したわけではない」の応用である。森山 (1988)、p.159 を参照。

(36) a.　太郎が水を（水素と酸素に）分解しているが、まだ全部（完全に）分解したわけではない。

b.　水が（水素と酸素に）分解されているが、まだ全部（完全に）分解されたわけではない。

(37) a.　ナポレオンがフランス領土を拡大しているが、まだ全部（完全に）拡大したわけではない。

b.　フランス領土が拡大されているが、まだ全部（完全に）拡大されたわけではない。

(35)～(37) で見られるように、「解決する」「分解する」「拡大する」の動詞は、「～ているが、まだ全部（完全に）～たわけではない」というテストにおいて、他動詞文と受動文の両方とも自然であることが分かる。前述のように、「解決する」は、「～ている」形が他動詞文では「進行」の意味を、受動文では「結果」と「進行」の両方の意味を表わす。他動詞文の「～ている」形が「進行」を表わすということは、主体が行う動作の過程に焦点が置かれており、その変化の結果までは含まれていないということになる。よって、(35a) (36a) (37a) では、「～ているが、まだ全部（完全に）～たわけではない」というテストが成立するのである。受動文の「～ている」形の意味が「結果」と「進行」の両方とも可能であることも、このような「過程性」で説明できるのであろう。主体動作・客体変化動詞の受動文の「～ている」形が「結果」を表わすことは、すでに先行研究で言われた通りである。しかし、動作主が存在しないにも関わらず、「進行」の意味を表わすのは、上述のような「過程性」が関わっているからであると考えられる。つまり、「解決する」「分解する」「拡大する」の動詞が他動詞文と受動文において「進行」の解釈が可能になるのは、「＋過程性」の性質を持つためであると考えられる。

では、他動詞文と受動文の「～ている」形が「結果」の意味を表わす「停止する」のような動詞の場合について考えてみたい。

(38) a.??太郎が車のエンジンを停止しているが、まだ全部（完全に）停止したわけではない。

b.??車のエンジンが停止されているが、まだ全部（完全に）停止されたわけではない。

(39) a.??部長がＡ社との取引を中断しているが、まだ全部(完全に)中断したわけではない。
b.??Ａ社との取引が中断されているが、まだ全部(完全に)中断されたわけではない。

(40) a.??政府が税率の引き下げという国民の要求を実現しているが、まだ全部(完全に)実現したわけではない。
b.??税率の引き下げという国民の要求が実現されているが、まだ全部(完全に)実現されたわけではない。

(38)～(40)から分かるように、「停止する」「中断する」「実現する」は「～ているが、まだ全部(完全に)～たわけではない」というテストにおいて、他動詞文と受動文の両方とも不自然である。これらの文が許されないのは、これらの動詞は「－過程性」の性質を持っており、主体の運動としての過程の局面を取り上げることができず、変化の結果だけを表すためであると考えられる。つまり、(38)～(40)の「～ている」が、「すでに(完全に)その結果になっている」という意味を表わすため、「まだ全部(完全に)～たわけではない」という文脈が続くと不自然な文になってしまうのである。

(41)～(43)の文について、「結果」ではなく「進行」の意味として解釈する話者もいるかもしれない。

(41)　太郎が車のエンジンを停止している。
(42)　部長がＡ社との取引を中断している。
(43)　政府が税率の引き下げという国民の要求を実現している。

たとえば、(41)の場合、「管理人が水車をゆっくりと停止している」のようにすれば「進行」解釈が不可能でもない。つまり、話者が、その「過程性」というものをどのように捉えるのかによって「～ている」形の意味の判断に揺れが生じることも否定できない。しかし、「停止する」「中断する」「実現する」のような動詞は、「過程性」を持つとしても、その過程は一瞬のことであり、一般的には変化の結果を表わすのが普通であると考えられる。これらの動詞が「過程性」を持たないということは(44)～(46)の文からも確認することができる。

(44) a.??太郎は車のエンジンを一生懸命に停止している。
b. 太郎は車のエンジンを一生懸命に停止させている。

(45) a.??部長はＡ社との取引を一生懸命に中断している。
b. 部長はＡ社との取引を一生懸命に中断させている。

(46) a.??政府は税率の引き下げという国民の要求を一生懸命に実現している。
b. 政府は税率の引き下げという国民の要求を一生懸命に実現させている。

「停止する」「中断する」「実現する」の動詞は、「一生懸命」という副詞と共起する場合、「している」形ではなく、「させている」形の方が自然な文になる。

5. おわりに

本稿では、「解決する」のような動詞と「停止する」のような動詞が、他動詞文と受動文においてそれぞれ異なる「～ている」形の意味を表わすことを指摘した。そして、その理由として、(47) に示すように、これらの動詞が持つ「過程性」と「結果性」の違いに原因があることを主張した。

(47) a. 「解決」「分解」「拡大」:「＋過程性」「＋結果性」
b. 「停止」「中断」「実現」:「－過程性」「＋結果性」

参考文献

金水敏・工藤真由美・沼田善子 (2000) 『時・否定と取り立て』　岩波書店
工藤真由美 (1982) 「シテイル形式の意味記述」『武蔵大学人文学会雑誌』13：4 pp.51-88 武蔵大学
工藤真由美 (1995)『アスペクト・テンス体系とテクスト―現代日本語の時間表現―』ひつじ書房
杉本武 (2002)「「ている」形の解釈と動作主性について」『文藝言語研究　言語編』42

pp.37-50　筑波大学
杉本武 (2007)『現代日本語の受動文と格の研究』　筑波大学博士 (言語学) 学位論文
楊卨郎 (2007)「自動詞・他動詞用法に意味的制限を持つ自他両用動詞について―二字漢語動詞を中心に―」『筑波日本語研究』12 号　pp.65-88　筑波大学人文社会科学研究科　日本語学研究室
楊卨郎 (2010)「他動詞文と自動詞使役文の使い分けについて―自他両用の二字漢語動詞を中心に―」『次世代の東アジア学生知的交流国際会議　予稿集』　筑波大学人文社会科学研究科 IFERI・漢陽大学 Brain　Korea 21 主催　於筑波大学

ヤン ソルラン／人文社会科学研究科
(2010 年 10 月 30 日 受理)